

上野エリアにおける近代美術工芸界の形成と変遷にかかる
<ひと・もの・こと>のデータベース構築に向けて
**Constructing the Database of the Modern Japanese Art World
in Ueno Area**

逢坂 裕紀子 潘 夢斐

Yukiko Osaka Mengfei Pan

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府, 東京都文京区本郷 7-3-1

The University of Tokyo, Hongo 7-3-1, Bunkyo-ku, Tokyo

概要: 東京上野エリアは、江戸時代より文人が多く居住し、明治維新後には博覧会開催や美術学校開設の影響を受けて美術家・工芸家が集住した地域である。本研究は、東京上野エリアにおける美術工芸界に焦点をあて、現在文化施設に収蔵されている「作品」だけでなく、それらを制作した「人々」の関係性や「出来事」を、地理情報と結びつけて可視化することを目的としている。本報告では、データベース構築のこれまでの取り組みと課題について述べる。

Abstract: Ueno is the area where literati and artists settled and lived since the Edo period. After the Meiji Restoration, much more artists and craftsmen started to gather in this area under the influence of the National Industrial Exhibitions and establishment of the Tokyo School of Fine Arts (present Tokyo University of Arts). This research, through establishing a database of the modern Japanese art world in Ueno area, aims to provide biographical information on artists and craftsmen, social and individual events, their personal network as well as their art works. In this paper, we introduce the research results related to the modern art world in this area and proposes a database that has the potential to connect the varying elements.

キーワード: データベース, 美術・工芸, 作家, アートワールド, 上野

Keywords: database, fine arts and crafts, artist, art world, Ueno

1. はじめに

本研究プロジェクトは、東京都台東区と文京区に位置する上野・本郷地域に関する文化資源情報を、個別の機関等に依存せずに広く社会的に活用するための方策やそれを可能にするための環境等諸条件を検討するものである[1]。

2013年より、ミュージアム等の公的・私的施設及び個人のコレクションから、浮世絵、版画、図版や写真等の視覚資料、地域史料、地図、論文や一般書等の文献資料を対象に、上野公園にある「不忍池」に関する

資料の所在調査をし、それらの資料のデジタル公開状況を二次使用の許諾範囲と方法に着目して整理した。さらに2016年には、それらの調査研究に基づき、自由利用可能な資料画像と許諾手続きを経て利用可能な成了った資料画像をデジタルマップ上に表示して地理空間のなかで資料を閲覧するコンテンツツール「しのばず文化資源マップ」を作成した。(図1)。表示手法は資料画像が描いたものの場所や、描かれた／撮影された地点のおおよその位置を推定し、マッピングするという方法をとった。

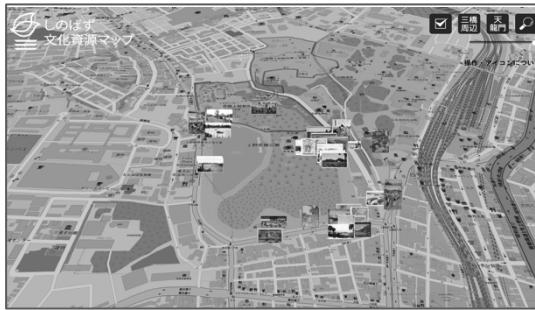


図1「しのばず文化資源マップ」トップページ

そして現在、本研究プロジェクトではデータベースの改良及びウェブアプリケーションの開発をすすめ、「しのばず文化資源マップβ」を作成中である。β版では、作品などの資料画像の表示だけでなく、作品制作に関わった人物情報を拡充し、彼ら彼女らの地域での活動や人物間の交流も可視化することで、作品を歴史や地域を横断したつながりのなかで捉えることを目的としている。

本稿では、これまで2カ年にわたって実施してきた上野エリアにおける近代美術工芸界に関する調査研究、そして現在すすめている「しのばず文化資源マップβ」の構築について述べる。

2. 上野エリアにおける近代美術工芸界に関する調査研究

2.1. 概要

本研究が対象とする「上野エリア」は、現在の上野公園を中心とした半径 1.5 キロメートルの地域を対象としている(図2)。今日、東京国立博物館、東京藝術大学、上野動物園、国立科学博物館、東京大学をはじめとする文化教育機関が林立している本エリアは「文教地区」としての顔を持っている。これらの機関は明治時代に創設された日本国内で最も長い歴史と大きい規模を誇るミュージアム、美術学校、大学であり、本地域を外して日本の近代美術とアカデミズムを語ることはできないと言える。

2016 年までの調査によって、江戸時代後期にはすでに多くの知識人や書画家がこのエリアに居住していたことが明らかとなった。そのため、先述した官立機関が設置される以前の時代も射程に入れ、江戸時代よりこのエリアにおいて、どのような芸術文化が誰によって涵養されてきたかを明らかにすることを試みた。また、江戸時代から明治時代へと社会環境および美術制度が大きく変遷していく過程のなかで、個々の美術工芸関係者がこの地域でどのようなネットワークを形成した



図2 本研究が対象とする「上野エリア」

か、地域性とネットワークにも注目することとした。以上ふたつの問い合わせ立てて調査をおこなった。

本調査を通じ、歴史のなかで埋没した美術工芸関係者情報の顕在化と彼ら彼女らの活動の痕跡やネットワークの可視化を課題として認識し、それらを地理情報と結びつけて表示するデータベースを提案する。

2.2. 江戸後期の市井の文化芸術活動と上野

先述したふたつの問い合わせに対し、地域史と美術史の一次・二次資料を主な手がかりとして江戸時代からの本地域の文化的環境に注目し、個人間の相互交流や緩やかなグループの形成、次第に制度化される組織まで、上野エリアにおける近代美術工芸界のネットワークを編み直すことを図った。

まず、日本の近代以前の文化芸術活動の全体像と江戸時代の上野について調査をおこなった。江戸の文化芸術活動は、ひとつには幕府の政策と武家社会制度を色濃く反映している。将軍家、大名家と寺院は芸術的創作や建築物の造営を主導的に動かしていた。一方で、富裕層の登場による町人文化の繁栄とともに文芸活動の商業化と町人生活への浸透も進んだ。

現在「美術家」や「工芸家」として認識される職種は、江戸時代においては「儒・書・画・詩」といったジャンルにおいて才能を發揮し活動していた「文人」、篆刻師、浮世絵師、建造物の装飾などに関わる彫り師、絵師、大工、陶工、金工をはじめとした職人として存在した。当時は身分や階層により社会的地位が決められる傾向が顕著だったが、個人の「塾」や書画会と呼ばれるサロン的空間で身分や職種、性別を越えた交流も交わされていた。

江戸時代の上野には、このような場所がいくつも存在した。本エリアは寛永寺の伽藍、加賀藩や水戸藩の大名屋敷、また幕府の学問所であった昌平黌が位置するなど官の色を濃く反映した場所であるが、寛永寺門前町として発展した「山下」と不忍池南側にある池之端、文人の隠居地で知られた根岸という存在も無視できない。その居住者の例として、池之端に居を構えた儒学者・漢詩人の服部南郭(1683-1759)、国学者・屋代弘賢(1758-1841)と医者・歌人の清水浜臣(1776-1824)、根岸方面では書家の亀田鵬斎(1752-1826)と絵師の酒井抱一(1761-1829)、と今日の秋葉原の近くに絵師の谷文晁(1763-1841)などがあげられる[2]。

居住地としては、江戸市中から離れ自然環境に恵まれた本地域が隠居地として親しまれた傾向が強いが、谷文晁の邸宅「写山楼」は画塾としても機能しており、数百人に及ぶ門弟を抱えていたという事例もある。幕末には、「下谷」(地形的に寛永寺のあつた「山」より東方面に広がる平坦な地域を指す)を居住地とし、儒・書・画・詩に関する活動をしていた「下谷文人」と呼ばれる人々が多くいた。長山樗園(生没年不詳)が1850年代に制作した「下谷文人地図」によると、漢詩人・大沼枕山(1818-1891)を始め、その人数は90数名にも及んだという。また、永井荷風も『下谷叢話』(初版1926年)において彼らの人生と交流を描き出した[3]。

また、このエリアは江戸時代の漢詩壇の中心地であった神田お玉が池から程近く、不忍池を中国杭州の西湖に見立てて詠まれた漢詩作品ものこる。花街であった池之端仲町は、規模では日本橋や神田に及ばなかったものの、寛永寺及びその御成道と隣接し、観光客に向けた飲食店や薬屋、本屋、袋物屋が軒を連ねひと・もの・情報が行き交う多様な文化の集結地であり、学者、篆刻師、浮世絵師も多数居住していた[4]。

このような社会環境は、下谷文人にとって交流や創作活動をおこなうのに絶好の居住地であったように思われる。実際に不忍池弁天島や池之端にあった料亭は漢詩壇の年中行事や文人の集会の会場として頻繁に使用された。幕末から明治期にかけて活躍した南画家の奥原晴湖(1837-1913)が弁天島で開いた披露会には当時の著名な下谷文人たち25名が集った(図3)。

こうして、江戸市中から離れて自然環境に恵まれている一方で、寛永寺の門前町としての町人文化が発展した上野において、文化的土壤が築き上がり市井の芸術文化が育ったといえる。



図3 慶應元年不忍池弁天島で開かれた奥原晴湖の
披露会出席者 25名からの寄せ書画

2.3. 近代化のなかの上野の美術工芸界ネットワーク

次に明治時代以降の上野について見ていただきたい。明治維新によって上野エリアは激変し、文化・芸術に携わる人々も政治的変化による打撃を受けたが、芸術文化と地域との関連性は途絶えなかった。江戸からの流れを汲む文人、南画家、職人に加えて、新政府主導の美術の制度化により誕生した美術家も数多くこのエリアに集まることとなったためである。

寛永寺境内地であった上野の山は、戊辰戦争によってほとんどの伽藍を焼失し、明治9年には上野公園として開園した。公園は華やかな博覧会の地としても使用され、観光地として再び賑わいを示し、浮世絵の題材としても好都合であった。本郷台地に建っていた元加賀藩邸の北側は文部省用地となり、そのなかに建てられた大学(現・東京大学)の教師館には動物学教師・エドワード・S・モース(1838-1925)や、のちに日本

美術の優位性を唱えるアーネスト・フェノロサ(1853-1908)らが居住した。その後、医学部、工学部、法学部、理学部、文学部が徐々に集結し、本郷台地に東京大学が形成された。一方、上野では博覧会の美術館建築を利用した博物館(現・東京国立博物館)の開館、東京美術学校および東京音楽学校(現・東京藝術大学)の開校、上野図書館(現・国立国会図書館国際子ども図書館)の開館と官立施設が次々と設立され、寛永寺の境内から文教の柱へと変貌を遂げた。

江戸から明治へと時代が移っても、先述した下谷文人の活動が衰えることはなかった。また、博覧会開催と殖産興業隆盛の影響を受けて主力輸出品である工芸品に制作に携わる人々の移住がみられた。牙彫作家として高い人気を博した旭玉山(1843-1923)もその一人である。

また、川上冬崖(1828-1881)、横山松三郎(1838-1884)、町田久成(1838-1897)、高村光雲(1852-1934)、岡倉天心(1863-1913)、横山大観(1868-1958)、石井柏亭(1882-1958)、朝倉文夫(1883-1964)などの洋画、地図製作、写真、美術行政、美術教育、日本画、彫刻に携わる人物もこのエリアに居住した。博物館と美術学校は彼らの職場であり、江戸時代より比較的自由に居住地を選択できるようになったため「職住接近」という考えがあつたように思われる。

また、不忍池弁天島の料亭は江戸時代から引き続き漢詩人の詩筵や文人らの書画会会場として使用されただけでなく、近代美術の発展に重要な役割を果たした龍池会、彫工会、観画会などの展示会場としても使われた。創作に直接に関わる美術家、工芸家のほか、政界人、貿易商、職人、医学者、哲学者など多様なメンバーが後者の会合に積極的に参加し、この地で近代美術工芸界の形成に力を入れていた。

また、官立の美術学校設立後も、住居内に生活と教育の場の両方の機能を備えた私塾は依然として多数存在し、小規模な美術拠点となつた。例として、川上冬崖の聴香読画館、奥原晴湖の春陽家塾、横山松三郎の通天楼、原田直次郎の鐘美館、川端玉章の川端画学校、小山正太郎の不同舎、明治美術会、本郷洋画研究所、朝倉文夫彫塑塾などがあげられる。また、美術学校を追われた岡倉天心は、同志とともに展示空間と研究機関的性質を併せ持つ日本美術院を谷中に設立した。視覚芸術のみならず、森鷗外の觀潮樓歌会や正岡子規の根岸短歌会も開かれていた。これら

の民間組織はこの地にある美術学校、大学の補足的な機能を果たしていた。

人数は多くはないが、アジアからの留学生も上野にやってきた。東京美術学校で油絵と音楽を勉強し、のちに中国近代美術教育と演劇改革を指導していた李叔同(1880-1942)はその中の一人である。李は学校の付近に下宿し、日本の新劇の同志と交流し、「春柳社」という中国人留学生の芸術団体を立ち上げ本郷にあった春木座で公演を行なつた。

このような事象から、明治時代において「美術」の制度化の進行と並行して、分野や国境を超えた美術関係の個人交流や在野グループの活動も開花したと見受けられる。江戸時代からこの地で活動していた文人、お雇い外国人教師、新たな近代美術の創造と美術教育に力を入れていた美術工芸家や行政家、アジアからの留学生はそれぞれに緩やかなネットワークを築きあげ、地域との交流を繰り広げていた。日本の近代美術工芸界において上野はまさに磁場のように見える。

2.3. デジタル技術による美術工芸界の形成と変遷の可視化に向けて

以上の歴史調査を通して、明治時代に官立機関が成立した前後に、個人やグループとしてこのエリアで居住や活動をしていた美術工芸関係者たちの全体像が浮き彫りとなつた。比較して現在、上野の山は展覧会と美術教育がおこなわれる「文化の杜」として認識されているが、生活空間と接続して美術家・工芸家がせめぎあい、作品が生み出される光景は色褪せたように思われる。先述した民間組織の一部は名称や場所の変化を遂げて今日まで至るケースもあれば、歴史の中で姿を消したケースもある。現在確認できるのは、横山大観記念館、朝倉彫塑館、森鷗外記念館、また復元された子規庵、中村不折が自ら建てた書道博物館といったまちの中に点在している小規模なミュージアム、文京区と台東区教育委員会によって設置された夏目漱石、樋口一葉、高村光雲・豊周(光雲の次男、彫金家)、森鷗外といったこの地に所縁のある文学者や芸術家の旧居跡や文学作品の中の情景を説明する標示板である。

その一方、牙彫作家の旭玉山が暮らした湯島天神町や南画家の奥原晴湖が20数年間暮らした摩利支天横丁には痕跡が残っておらず、それぞれの活動分野であった牙彫と南画の明治中期以降の美術史にお

ける評価の凋落とあいまって作家自身も忘れ去られているように見受けられる。また、旭玉山と奥原晴湖の作品や資料は東京国立博物館をはじめとする国内外のミュージアムに収蔵されているが、彼らが生活していた地域やそこで構築された人的ネットワークに焦点を当てた展示や活動は必ずしも多くない。作家の人生と足跡を確認できる場所とコンテンツは限られている。

こういった後世における評価の低落により忘却された美術家・工芸家情報を顕在化し、彼ら彼女の活動の痕跡や人的ネットワークを可視化することは、日本の近代美術制度が前時代からの芸術文化とどのような連続性あるいは断続をもって展開されたかを明らかにする手がかりになるだろう。そこで、本プロジェクトは今日のミュージアム・コレクションとアーカイブを活用し、デジタル技術を用いて、人物の人生の歩み、作品の背後にいる物語や人的ネットワークといった情報を本地域の場所性と作品制作環境と結びつけて提示できるデータベースを提案する。

3. <ひと・もの・こと>のデータベースの構想

3.1. しのばず文化資源マップ(2016年構築)の概要

まず今回構築した「しのばず文化資源マップβ」のベースとなった2016年作成のプロトタイプ「しのばず文化資源マップ」の概要を述べる。

本プロジェクトでは2016年に、東京国立博物館、江戸東京博物館、Rijksmuseumをはじめとした国内外各施設が一般に公開しているデジタルアーカイブ、また企業(乃村工藝社博覧会コレクション)と個人(林丈二氏)のコレクションから、不忍池の景観構成に関わる視覚資料を調査し、浮世絵・写真・絵葉書・図版・地図など425点をリスト化した。これらの資料のうち、14パーセントにあたる59点がfair useか保護期間満了、public domainとして第三者が自由にデジタル画像を利用することができる環境に置かれていた。

続いてOpenStreetMapの電子地図をベースとして、時代の異なる3つの地図資料を重ね、先述の自由利用可能な視覚資料の画像を制作年代に近い各時代の地図資料と重ね合わせ、関連位置(写っているまたは描かれている場面の場所か作成者の立ち位置)にプロットし、時空間の行き来を可能した地図表示システムのプロトタイプ「しのばず文化資源マップ」を作成した。マップ上に表示したコンテンツは以下のものである。

1. ミュージアム等公的・私的施設所蔵の作品画像

江戸東京博物館、東京都立図書館、シカゴ美術館Rijksmuseumなどのミュージアム施設が一般に公開しているデジタルアーカイブの作品画像。

2. 個人コレクションの絵葉書き像

明治文化研究家である林丈二氏所蔵の明治大正期の絵葉書きコレクションの画像。

3. 古地図

江戸時代の地図「寛永江戸全図」と「五千分一東京図測量原図」(参謀本部陸軍部測量局 1886-1887)。

プロトタイプとして作成したマップは、この地域に蓄積してきた文化と空間資源の価値を再認識してもらうツールとして有用であり、ミュージアムのデジタルアーカイブを活用し、第三者が文化資源から地域の価値(再)形成に能動的に関与することの潜在的な可能性を示せたと考える。

その一方で、プロトタイプに格納したコンテンツは浮世絵・写真・絵葉書きといった視覚資料に偏重しており、この地域で生活や活動していた数多くの美術家・工芸家に関する情報や、彼ら彼女の活動の痕跡や交流関係に関する情報の可視化が課題として残された。

3.2. 上野及び周辺エリアの地政学的変遷の可視化

そこで、2017年には基礎資料調査として、明治初期に上野公園で開催された第一回から第三回の内国勧業博覧会の報告書、『内国勧業博覧会美術品出品目録』(東京国立文化財研究所 1996)、明治時代の図案集『温知図録』と『温知図録:調査研究報告書』(東京国立博物館編 1997)、東京国立博物館『『列品録』件名目録の明治期分』、と2004-2013年東京国立博物館で開催されていた「近代工芸」展覧会出展物リストなどの資料の整理と分析を通して全貌の把握に努めた[5][6]。

これらの資料のなかから、まず『内国勧業博覧会美術品出品目録』に掲載されている東京府からの出品者情報(作品名・出品者名・住所)約600件、そして『温知図録:調査研究報告書』の「人名注解」で解説されている江戸・東京の出身者もしくは江戸・東京で活動していた人物や店に関する情報87件をデータベースに格納した。

明治初期に開催された内国勧業博覧会の出品者の住所情報を地図上にプロットすることで、第一回(明

治 10 年・1877)から第三回(明治 23 年・1890)にかけて、出品者の居住地域が浅草方面から徐々に西へ、上野周辺地域へ集まつていった傾向を明らかにすることができた。今後さらに内国勧業博覧会前後の人物および住所情報の蓄積を重ねることで、前近代から現在までの上野及び周辺地域の芸術文化にまつわる地政学的变化を明らかにすることが期待できる。

3.3. 作家の活動－移動・ネットワーク・地域性－に関するデータベース

『温知図録：調査研究報告書』の人物データからは、出生地の任意性はあるものの、このエリアに居住していた縁故者(親類、同郷者、師、友人)の存在や進学・就職が上野への移動と集中に影響を与えていたことがわかった。

さらに、対象となった人物のなかから幕末から明治後期にかけて上野エリアで活動していた人物 10 名(加納夏雄、河鍋暁斎、橋本雅邦、奥原晴湖、旭玉山、高村光雲、岡倉天心、横山大観、鏑木清方、石井柏亭)を抽出し、個々の自伝や隨筆、日記、書簡、他伝などの美術史資料の調査と分析を実施した。これにより、居住地選択のさいに人的要素の影響が強かつたことや、個々の転入がその場所のネットワークの密度をあげ、相互関係の増強や新しい関係性の形成につな

がったことを描き出した。これらの調査によって得られた情報は、現時点ではデータベースにはまだ格納されていないが、彼ら彼女らの軌跡やネットワーク形成と地域の関係性を示す資料として、将来的に「文化資源マップ β」で可視化することを目指している。

次節では、以上の調査研究をふまえて現在開発中である「しのばず文化資源マップ β」(図 4)のデータベースとウェブアプリケーションについて述べる。

4. 「しのばず文化資源マップ β」概要

4.1. データベースシステム「APLLO」の構築

本プロジェクトで扱う情報は、様々な組織や個人が資料を所有しているために、散在している。本プロジェクトでは、そうした資料の情報だけを収集し、それぞれの資料の関連性を紐づけた形での保存を可能にするデータベースを用いて、その登録フォームを構築する。

従来のデジタルアーカイブは、データ構造の頻繁な変更が困難であった。それは、デジタルアーカイブの多くが、リレーションナル・データベースマネジメントシステム(RDBMS)を用いて、各々作成したいアーカイブに応じて、格納したいデータ構造に対応したテーブルを作成し、スキーマを設定する手法によってシステムが構築される。しかし、RDBMS は後からのスキーマの変



図 4 しのばず文化資源マップ β



図 5 フォーム生成画面

更が困難な情報保存方法となっており、最初の段階で専門家によって緻密な情報保存方法の設計が求められる。そのため、従来のデジタルアーカイブの情報保存方法の設計概念だと、頻繁なデータ構造の変更を困難にするため、保存する情報に新たなメタデータや解釈、想定外の資料の追加があったとしても、柔軟かつ早急に対応できなかった。

そこで本プロジェクトでは、従来のデジタルアーカイブにおけるデータベース構造の問題を解決し、可変性高く、データ間の関連性を構造的に格納するデータベースとしてデータベースシステム「APLLO」を用いたデータベースを構築した。APLLO は、デジタルアーカイブに保存するデジタルな情報を「アーティクルコレクション」「アーティクル」「フラットデータ」の3種類のエンティティ(IDによる識別され、同一性が保持される情報単位)に分解し、その組み合わせによって情報をデータベースに格納する。そのため、データベースの可変性高く、柔軟に情報を保存する。

この APLLO のデータベースに、資料を登録しやすいフォームを開発した(図 5)。このフォームは、テキストデータ、画像データ、位置情報の 3 種類の型を選ぶことができる。収集したい情報に基づいて、型を選ぶことができ、フォームが生成される(図 6)。また、データの関連性をつなげる部分として、新規に作成するフォームに別で生成したフォームと接続させることができる。例えば、ある作品(作品名、作品概要、制作者、、、)の入力において、ある芸術家の人物情報(名前、住所、生年月日、、、)をあらかじめ入力しておけば、制作者として紐付けをすることができる。そうすることで、データベースではネットワーク構造としてデータが保存される。本プロジェクトでは、内国勧業博覧会の



図 6 入力フォーム

情報、人物情報、作品情報のフォームを作成し、それぞれの情報を関連づける形でデータを入力した。

4.2. ウェブアプリケーションの開発

本プロジェクトでは、データベースに格納した情報を「しのばず文化資源マップ β」として地図に可視化した。まず、作家の人物情報と作品情報を紐づけて、作家の住所情報をもとに点データとして描画した。この表現は、現時点では作家の写真データや、作品の写真データがないため、居住地を示すだけとなっている。一方、詳細な作家の情報や作品情報を収集でき、データベースに格納したものに関しては、作家の居住軌跡を辿ることができる形で地図に描画した。^[7]

5. おわりに

本プロジェクトは、東京上野エリアにおける美術工芸界に焦点をあて、現在文化施設に収蔵されている「作品」だけでなく、それらを制作した「人々」の関係性や地域との関わりを、地理情報と結びつけて可視化することで、美術史や地域研究における新たな学術的知見を提示するのみならず、地域に歴史・文化資源を還元していくことを目指している。

今後は、東京文化財研究所が公開している「明治大正期書画家番付データベース」^[8]の書画家人名および住所情報の入力を予定している。また、国内外の文化施設や研究機関のデジタルアーカイブで公開されている資料を再調査し、上野エリアにおける近代美術工芸界にかかる資料のうち自由利用可能な資料や許諾手続きによって利用可能になる資料の「しのばずマップ β」への格納を進める予定である。情報蓄積の一方で、人物の居住地や年代の変化による人的ネットワークの遷移の可視化方法についてはさらに検討していきたい。

今日、文化施設や学術機関が所有する資料のデジタル化と公開がますます求められている。一部のミュージアムコレクションは、作家が地域での活動や人物間の交流を持っていたために誕生したというストーリーを付け加えることで、作品をただ建物の〈内〉で鑑賞されるものとしてではなく、ミュージアムを包む〈外〉の地域との関係性のなかに位置付けることができる。データベースの構築とウェブアプリケーションによる可視化によって、作品を歴史や地域を横断したつながりのなかで捉えること点は、既存のミュージアムコレクションやアーカイブの活用可能性に新たな地平を拓き、これまでになかった鑑賞体験をもたらしうるだろう。

<http://www.tobunken.go.jp/materials/banduke>
(参照 2019年2月5日)

6. 付記

本研究は、東京大学大学院情報学環吉見俊哉研究室・渡邊英徳研究室と凸版印刷株式会社の共同研究の一環で実施した「しのばず文化情報活用プロジェクト」の活動に基づくものである。また、本稿第4節の執筆は、データベースおよびウェブアプリケーション開発者である田村賢哉氏（渡邊英徳研究室）にご協力いただいた。

参考文献

- [1] しのばず文化情報活用プロジェクト.
<http://www.shinobazu-prj.jp> (参照 2019年2月5日)
- [2] 鶴岡明美, 「写山楼と足立-船津家資料が結ぶ二つの地域-」, 足立区立郷土博物館, 「美と知性の宝庫 酒井抱一・谷文晁とその弟子たち: 文化遺産調査特別展」図録, 2016, pp. 11-17.
- [3] 永井荷風, 『下谷叢話』, 岩波文庫, 2000.
- [4] 西邨宗七編, 『江戸現在廣益諸家人名録』, 須原屋佐助, 1837.
- [5] 東京国立文化財研究所編, 『内国勧業博覧会美術品出品目録』, 東京国立文化財研究所, 1996.
- [6] 東京国立博物館, 『温知図録_調査研究報告書』, 東京国立博物館, 1997.
- [7] しのばず文化資源マップβ.
<http://shinobazu.apollo.io/cesium/> (参照 2019年2月5日)
- [8] 東京文化財研究所, 明治大正期書画家番付データベース.